清少納言

村井 順著

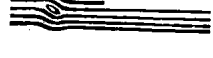
笠間選書 74

笠間書院

清少納言

村井　順　著

笠間選書 74



笠間書院

村井　順（むらい じゅん）

略　歴　1904年3月28日、岐阜県に生まれる。
1929年3月、早稲田大学文学部国文科卒業。
1960年3月、文学博士
現在、愛知淑徳短大教授

著　書　『源氏物語論』上・下（中日教育文化会）
『常縁本徒然草・解釈と研究』（桜風社）
『建礼門院右京大夫集評解』（有精堂）
『枕草子その自然』（笠間書院）
『清少納言をめぐる人々』（笠間書院）　その他

現住所　〒466　名古屋市昭和区楽園町57

笠間選書74　清少納言
昭和52年5月30日　初版第1刷発行
定価1500円　－検印省略－
著者　村井　順 ©
発行者　池田猛雄
印刷　モリモト印刷／松坂タイプ
製本　笠間製本所
発行所　有限会社笠間書院
〒101　東京都千代田区神田神保町1－46
電話　03－295－1331　振替 東京 1－56002
書籍コード　1391－953074－0924

序にかえて

十二月三十日

三十日の朝十一時　今年最後の診察終り　バスを降りゆるゆる帰るに　霊柩車を先頭にして　会葬の車のあまた　あとにつづき走りて行けり　そのうしろにまた霊柩車　会葬の車従へ　走り行くは同じき所　あと二日で元日といふに　わづかなる二日・三日も　人の世のさだめは待たず　世の無常は常識として　心には思ひてをれど　今朝といふ今朝は胸うたれ　わが身またかくあらんかと　しばらくは足をとどめて　ながめゐたりき

反　歌

霊柩車二台もつづけり正月は二日のさきと人はいそぐに

村井　順氏

年の瀬に逢ひたる人の　先生の書かれし書物　読みたりと語りしからに　それならば枕草子の　等間なる新刊ならん　そのやうな古典にあらず　「日本よ何処へ行く」なり　かくいふにそれはわれとは同じ名の村井順てふ　いま一人の書かれしものなり　時々にまちがひ起こり　迷惑をわれもするゆゑ　われならぬ村井順氏も　古典までお書きになるかと　言はれては戸惑ひ給はん　かく言ひて笑ひ

てありしが　卒業生の年賀状にも　同じ名の本読みたりと　得意げに書き添へありき　われの書く古典の書物は　さまで売れぬものなるゆゑに　迷惑はむしろあちらの　いま一人の村井氏ならん　とは思へど悪名ならぬ　村井順が二人ありとて　さほどまで苦にすることも　あるまじと思ひをりけり

こちらの順は

反　歌

同じ世に二人の元輔睦みゐて清少納言も戸惑ひしけんか

昭和五十二年四月

著者

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

凡　例

一、本書は同じく笠間選書の拙著、「枕草子・その自然」・「清少納言をめぐる人々」とともに、三部作のつもりである。

一、本書の底本には、三巻本である日本古典文学大系の本文を用いた。したがって、段数もそれに従ったが、任意に漢字に改めたり、句読点を変えたりした。

一、本書におさめた論文中、「清少納言集について」は、旧稿をまったく新しく書きなおしたものである。その他の論文は、「淑徳国文」・「研究紀要」（ともに淑徳短大発行）に発表したものに、筆を加えたものである。

清少納言　目次

序にかえて
凡　例
清少納言について……一
清少納言と和歌……二一一
清少納言と返歌……二三七
「清少納言集」について……二六一

清少納言について

一、顔について

「枕草子」には、作者が自分の容貌について書いている所は極めて少い。だから、清少納言の面影を想像することは非常に困難である。

よく引用される文だが、「古事談」第二、臣節に、

頼光朝臣遣四天王等令打清監之時、清少納言同宿ニテアリケルガ、依似法師欲放之間、為尼之由云エントテ忽出開云々。

といっており、また、

清少納言零落之後、若殿上人アマタ同車、渡彼宅前之間、宅体破壊シタルヲミテ、少納言無下ニコソ成ニケレト車中ニ云ヲ聞テ、太自桟敷ニ立タリケルガ、簾ヲ掻上ゲ如鬼形之女法師顔ヲ指出云々、駿馬之骨ヲバ不買ヤアリシト云々。

といっている。これらは老後の清少納言の姿を、伝説的に語っているもので、全面的には信用することはできないものである。けれども、たとえ伝説であり、老後の話であるにしても、こんなに醜女であるということは、若い時も美人ではなかったろうという想像が、可能であるような気がする。

「枕草子」の中では、どんな容貌が想像されるかというと、四九段、「職の御曹司の西面の」の中で、行成は清少納言に向かって、次のようにいっている。

まろは、目はただざまにつき、眉は額ざまに生ひあがり、鼻は横ざまなりとも、ただ口つき愛敬づき、おとがひの下・首、清げに、声にくからざらん人のみなん思はしかるべき、とはいひながら、なほ顔いとにくげならん人は心うし。

これは清少納言の容貌が、「口つき愛敬づき、おとがひの下・首、清げに、声にくからざらん人」であることを、行成がよく知っていて、彼女にへつらっているのだという論者もいる。もしもそうだとすると、行成という人間は、見えすいたごきげん取りをする男で、ずいぶんいやな人間であるが、しかし、「枕草子」や「大鏡」を読んでもわかるが、行成はそんな男ではないと思う。筆者は、これはただ行成が自分の容貌の好みをいっただけで、清少納言の容貌とは関係ないものだと思う。

それは同じこの段で、行成が清少納言に向かって、「あなたと私は、仲がよいと人にいわれています。こんなに親しくしているのなら、どうして恥ずかしがることがありましょう、顔を見せなどもなさい」といった時、彼女は、

いみじくにくげなれば、さあらん人をば、え思はじとのたまひしによりて、え見え奉らぬなり。

と答えた。すると行成は、

げににくくもぞなる。さらばな見えそ。

といって、自然と見ることができる時も、「おのれ顔ふたぎなどして見給はぬ」というありさまだったというからである。

筆者はやはり行成が清少納言の容貌を残りなく見たのは、この段のあとの方の、明け方に一条帝と

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

定子中宮が、清少納言らの局へ来て、陣を出たり入ったりする者を、ご覧になっていた時のことであると思う。すなわち、行成は、女は寝起きの顔が、とても美しいということを聞いて、ある人の局へ行ってのぞいて、もう外に見ることはできないかと、清少納言の局へ来てのぞいた時のことである。行成はその時、「いみじく名残なくも見つるかな」といっている。彼はこの時はじめて清少納言の顔を、すっかり見たのだと思う。

横道へそれたが、行成が、「まろは、目はただざまにつき、眉は額ざまに生ひあがり、云々」と、自分の好みを語ったとあるあとで、作者は、「ましておとがひ細う、愛敬おくれたる人などは、あいなくかたきにして、御前にさへぞあしざまに啓する」といっている。これを読むと、清少納言自身は、「おとがひ細う、愛敬おくれたる人」ではなかったと考えられるではないか。

前に述べたように、この段で清少納言が行成に対して、「いみじくにくげなれば、さあらん人をば思はじとのたまひしによりて、え見え奉らぬなり」といっていることばには、もちろん卑下の意味もあるであろう、がしかし、これが清少納言の本心であると、筆者は考えるものである。

二七一段「人の顔に、とり分きて」で、作者は次のようにいっている。

人の顔に、とり分きてよしと見ゆる所は、たびごとに見れども、あなをかし、めづらしとこそおぼゆれ。絵など、あまたたび見れば、目もたたずかし。近う立てたる屏風の絵などは、いとめでたけれども、見も入れられず。

人のかたちはをかしうこそあれ。にくげなる調度の中にも、一つよき所のまもらるるよ。みに

くきも、さこそはあらめと思ふこそわびしけれ。

人の顔のチャーム・ポイントは、何度見ても、まあ美しい、新鮮な感じ、と思われるが、反対にウイーク・ポイントもまた、何度見ても、まあみっともないと思われるだろうといっている。この段の最後のことば、「みにくきも、さこそはあらめと思ふこそわびしけれ」というのも、自分の顔の醜さを知り抜いたことばではないか！　彼女は自分の顔にはまったく自信がなく、「いみじくにくげなり」とあきらめていたのであり、「みにくし」と嘆いていたのである。

だが、「枕草子」をいくら読んでも、清少納言の顔は、これ以上にはわからない。清少納言がこのように、自分の顔に自信を持っていなかったこと、いやむしろ劣等感を抱いていたことは事実である。けれども、行成や美男子の斉信などと親しく交わったり、言い寄られたりしているところや、藤原実方と一時夫婦であったりしたことから考えると、彼女は決して醜女だったとは思われない。確かに髪は短かった、けれども、人並の容貌だったと思われる。どんな美人だって、「私はどこも欠点がなく美しい」と思っている女はいないと思う。それは、「私はもうこれだけ金を持っているから満足だ」と思う人間がいないのと同じである。人間はどこまでいっても満足はしないものだし、欲望は絶えることのないものなのだ。

「かげろふ日記」の作者は、「尊卑分脈」に、「本朝第一美人三人之内也」と書かれているほどの美人だ。それでも、彼女は自分の日記の冒頭で、「かたちとても人にも似ず」といっている。これは老年の筆だからでもあるが、それにしても、女の容貌だけは、本人がみにくいといっていることを本

当にしたら、とんでもないまちがいとなる。清少納言だって、自分では容貌に自信を持っていなかったが、若いころや壮年のころは、醜女だったとは決して思われない。

二、髪について

平安朝のころは顔も問題であったが、髪も長くてくせのない黒髪を重視したことは常識である。ところが、清少納言はその髪がよくなかったのである。一八四段、「宮にはじめてまゐりたるころ」で、作者は中宮の御前で絵を見せていただいている場合を叙べて、「高坏に参らせたる御殿油なれば、髪の筋なども、なかなか昼よりも顕証に見えてまばゆけれど、念じて見などす」といっている。だが、この叙述では作者の髪がどんなであるか、まだよくわからない。

同じ段の後の方で、伊周が雪見舞に中宮の所へやって来て、新参者の清少納言を珍しがり、傍へ寄って来て、彼女に物を問いかけている。その時の叙述に、「かしこき陰とささげたる扇をさへ取り給へるに、振りかくべき髪のおぼえさへあやしからんと思ふに、すべてさるけしきもこそは見ゆらめ」というのがある。この叙述を見ると、彼女は顔と同様、髪に対しても、自信のなかったことが察せられ、彼女は宮仕の当初において、すでに髪に劣等感を抱いていたことがわかる。

二七八段、「関白殿、二月廿一日に」は、正暦五年（九九四）二月の事件である。そしてこの段を読むと、清少納言はいかにも新参者らしく恥ずかしがっていて、一八四段の初宮仕の記事と、彼女の心

中はよく似ている。その中に、彼女ら女房たちが、二条の宮から積善寺へ出かけるところがある。彼女らは中宮・淑景舎・三・四の君・貴子・その妹などが見ている前で、伊周と隆家の二人に世話されながら、車に乗ったのである。作者はその時のことを、

御簾のうちに、そこらの御目どもの中に、宮の御前の見苦しと御覧ぜんばかり、さらにわびしきことなし。汗のあゆれば、つくろひたてたる髪なども、みなあがりやしたらんと覚ゆ。

といっている。

ここの場合も、彼女が自分の髪に劣等感を抱いていることはわかる。けれどもこれだけの記事では、特に彼女の髪がどのように悪いかわからない。二月の末というのに、恥ずかしくて汗が出て、「つくろひたてたる髪なども、みなあがりやしたらん」というのは、髪を唐衣の下へ着こめていたためであろう。

いよいよ中宮の御輿が、二条の宮から積善寺へお出ましになる場面を、作者は次のように叙べている。

朝日の花々とさしあがるほどに、なぎの花いときはやかに輝きて、御輿の帷子の色つやなどのきよらささへぞいみじき。御綱張りて出でさせ給ふ。御輿の帷子のうちゆるぎたるほど、まことにかしらの毛など人のいふ、さらにそらごとならず。さてのちは、髪あしからん人もかこちつべし。

ここに、「かしらの毛など人のいふ」といっているのは、諸注がいっているように、感激が甚しいと、頭髪がみな立ちあがるということで、「怒髪上衝冠」（史記）といった昔からの言い草であろう。

そして、作者はここでも自分のことを、「髪あしからん人」といっている。だが、やはりこれだけのことばでは、彼女の髪がどのように悪いかよくわからない。（「髪あしからん人」というのは、作者が自分のことをいっているのだ、という筆者の説にまちがいはない。池田亀鑑博士は、「暗に自分を指すか」――全講枕草子・五一九ページ――といっておられるが、「枕草子」では、作者は自分のことを、こういう言い方をしている。田中重太郎博士は、「枕冊子」の頭注に、「悪い髪の持ち主たる自分たちも」としておられる。）

さて、中宮の御輿が積善寺に到着し、作者ら女房の車も桟敷（さじき）に着いて、下車することとなった。するとまた、出発の時と同様、伊周や隆家がそこに立っていて、「とうおりよ」という。作者は降りる時の恥ずかしさを、次のように書いている。

乗りつる所だにありつるを、いま少し明かう顕証（けそう）なるに、つくろひ添へたりつる髪も、唐衣の中にてふくだみ、あやしうなりたらん、色の黒さ赤ささへ見え分かれぬべきほどなるが、いとわびしければ、ふともえおりず。

これを見ると、作者の髪のようすがよくわかる。「つくろひ添へたりつる髪」といっているところをみると、作者は自分の髪が短いので、添え髪をしていることがわかる。また、「色の黒さ赤ささへ見え分かれぬべきほど」といっているところをみると、赤いのは作者の髪、黒いのはかもじの色であろう。

前にもいったように、この段は正暦五年（九九四）二月の出来事で、作者の宮仕早々のことである。清少納言という女性は、宮仕の最初から、髪は短く、赤かったことがわかる。

八三段、「かへる年の二月廿日よ日」は、道隆の喪中のことらしいから、長徳二年（九九六）のことである。作者は中宮が職の御曹司へ出られたのに、梅壺に残っていた。すると、そこへ頭中将藤原斉信が、着飾って訪れて来た。その姿は、「まことに絵にかき、物語のめでたきことにいひたる、これにこそはとぞ見えたる」という、すばらしいものである。作者はこの斉信を、梅壺の東面に迎えたのである。その時の自分の様子を次のように叙べている。

御簾の内に、まいて若やかなる女房などの、髪うるはしう、こぼれかかりて、などいひためるやうにて、もののいらへなどしたらんは、いま少しをかしう、見所ありぬべきに、いとさだ過ぎ、ふるぶるしき人の、髪なども我がにはあらねばにや、所々わななき散りぼひて、大方色ことなる頃なれば、あるかなきかなる薄鈍、あはひも見えぬうは衣などばかりあまたあれど、つゆのはえも見えぬに、おはしまさねば裳も着ず、袿姿にてゐたるこそ、物ぞこなひにてくちをしけれ。

ここでも作者は、「髪なども我がにはあらねばにや、所々わななき散りぼひて」といっている。やはりかもじを用いていたことがわかる。（なお「いとさだ過ぎ、ふるぶるしき人」というのは、作者自身をいっているものだ。二七八段の「髪あしからん人」が、作者をさしていることは、これでもよくわかると思う。池田博士は、ここも、「大層盛りのすぎたおばあさん連中」――全講枕草子・一六七ページ――と訳しておられる）。

八段、「大進生昌が家に」は、中宮が第一皇子敦康親王御出産のため、平生昌の三条邸へ移られた時の記事で、長保元年（九九九）八月のことといわれている。その中で作者は、

大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、ひんがしの門は四足になして、それより御輿は入らせ給

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com